

## 〈調査報告〉

# 中国山東における歴史遺産の現状と保存

森 部 豊

中国山東省には、古代中国の歴史遺産が数多く存在し、とりわけ世界遺産に登録されている「泰山」や「曲阜の孔廟・孔府・孔林」は日本でも馴染み深いものであろう。「泰山」はいうまでもなく、中国屈指の名山で、いわゆる五岳のうち東岳にあたる。漢族の信仰対象であると同時に、古代においては国家祭祀も営まれ、特に秦の始皇帝や漢の武帝はこの山との関わりが深い。一方、曲阜は儒家の祖たる孔子の故郷であり、また春秋時代の魯国が存在した場所である。

ところで、関西大学の東洋史研究室では、毎年1回、教員・学生の有志で中国を訪れ、メジャー・マイナーな遺跡・博物館を調査しており、2008年3月は、山東省を訪れた。空路、青島へ入り、バスで青島→青州→臨淄→済南→曲阜→臨沂→沂南→青島と移動し、山東省をほぼ一周してきた。その中には、「観光地」もあるが、普通のツアーでは訪れないような遺跡や、近年発見されたばかりの遺跡にも足を伸ばした。そこで、この紙面を借りて、訪れたうちのいくつかの遺跡の現状とその保存などについて紹介していきたい。

## 一 青州市博物館

青州では、北齊時代の重要な文物が出土しており、それらが青州市博物館の所蔵されている。有名なところでは、1996年に同博物館の南側の学校の校庭で発見された北齊の仏像群であろう。ここにはかつて竜興寺という仏教寺院があった。9世紀前半に唐へ渡った円仁が、五臺山へ赴く途中、逗留した寺院であるが、その寺院にあった仏像群が地下に埋められ、それが20世紀になって発見されたのである。

もう一点は、北齊時代の墓から発見された10枚の石板である。このうち8枚の石板には線刻がほどこされ、墓主の生前の暮らしの様子が再現されているが、その中の1枚には墓主と商談をする人物像が刻されていた。この人物の鼻の高さや髪の毛・服装の様子などから、西域からやってきた商人であろうと推測され、筆者自身はこれをソグド人であると考えている。この石板は、昨今の「ソグドブーム」のせいも、中国国外に貸し出されて展示されているため、見ることのできる機会が少ないが、その他の7枚の線刻のある石板のオリジナルは当博物館に展示してある。

## 二 曲阜の世界遺産とその保存

曲阜は周の時代、魯の国があった都市国家である。現在の曲阜は復元・整備された城壁によって囲まれているが、春秋時代の魯の都市規模はこれより大きかった。現在の曲阜の東郊に、この

春秋時代の城壁の一部が残存し保存されている。これによって春秋時代の魯国の規模がしのばれる。

曲阜には「孔廟・孔府・孔林」があり、世界遺産に指定されている。「孔廟」は魯の出身で、儒学の祖である孔子を祭った廟である。「孔府」はその東に位置する孔子の子孫が居住していた邸宅である。この2つは曲阜城内にあるが、孔子およびその子孫の墓域である「孔林」は曲阜城外にある。「孔林」観光は、車両の通行が制限されており、観光客は「孔林」の正門のはるか前で車を降りなければならない。「孔林」へ通じる道の途中には電気自動車が待機しており、これを利用するか、徒歩で観光するようになっている。近い将来、現在の城壁で囲まれた曲阜全体が同様な車両制限の措置をとることになっているとのことである。また、曲阜城内では建築物の高さ制限が設けられ、歴史文化的景観が保持されている。

曲阜の「孔廟」内には、数年前まで漢代の石刻（碑や石人を含む）や歴代の石碑・墓誌銘があったが、現在ではこれらはすべて「孔廟」の北側、「孔府」の西側にあたるエリアに「碑刻陳列館」が設けられ、集中保存されている。ここは庭の東・西・北に建物を配置し、南は塀をめぐらし囲んだ空間で、庭の中央には漢代の石人2体が置かれている。南側の塀には明代の墓誌銘がはめ込まれている。西側の建物は唐代の碑、墓誌銘、北側の建物には漢代の石碑、東側の建物には元代などの碑が保存されている。

### 三 臨沂市博物館および王羲之故居

臨沂市では2003年4月に大きな発見があった。それは、臨沂市内にある六朝時代の書家として有名な王羲之の故居を整備中、西晋時代の墓が発見され、そこから漆器、青銅製文物、陶器、金器が発見されたのである。

この出土文物の中で、筆者が特に注目したのは、獅子にまたがる胡人を象った水差しの陶器である。この胡人は、ひげを生やし、やや高い鼻を持つ容貌から西域のイラン系の人物をモデルにしたものであると推測できる。西晋時代には山東省の近くにまでソグド人という中央アジア出身のイラン系の人々が進出し商業に携わっていたことが別の史料から明らかになることから、この陶器の胡人もソグド人であろうと筆者は考えている。

さて、筆者は王羲之故居内で発見された西晋墓は埋め戻されたと考えていたが、現地を確認すると、きちんと整備され、一般公開に向けた準備が進行していた。筆者が訪れた2008年3月16日現在、一般にはまだ公開されていなかったが、たまたまテレビ局の取材で門が開いており、それに便乗して見学することが可能であった。中の様子は、レンガで構築された墓が2基あり、双方が地下通路によってつながられ、また墓室に入ることも可能である。レンガで構築されている墓室の外側を覆っていた土は取り除かれ、全体像の見学が可能で、さらに外側を一周できるように見学通路も整備されている。当該時期の中国の磚室墓を直接見聞できる貴重な歴史遺産といえることができるだろう。

なお、この西晋墓から出土した文物は王羲之故居の北側に位置する臨沂市博物館に所蔵されて

いる。同博物館には臨沂地区から出土した漢代の画像石も数多く展示しており、中国漢代史研究や古代思想史研究の材料の宝庫といえるだろう。

#### 参考文献

森部豊「四世紀～一〇世紀の黄河下流におけるソグド人」、鶴間和幸編『黄河下流域の歴史と環境—東アジア海文明への道』(東方書店, 2007年)

(関西大学准教授)